

機関番号：11601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730543

研究課題名（和文） 教師の省察的実践の創造に資する校内研修プログラムと授業の臨床的研究のデザイン

研究課題名（英文） The research on programs about in-school teachers' learning and The design of methods for lesson studies toward creating teachers' reflective practices

研究代表者

吉永 紀子 (YOSHINAGA NORIKO)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：30344823

研究成果の概要（和文）：校内での授業研究会において、授業者のみならず参観者が、授業や子どもの学びをとらえる際の自身の視点を自覚化できる支援—事後検討会における視点の可視化や、視点の意味づけ、問いの共有化—を行うことが、授業研究を通して同僚性を構築していく基盤となる。さらに、授業研究会で具体的な子どもの学びの事実を洞察し、教師同士で対話を継続していくなかで、自身の授業の見方・考え方、学習観や子ども観の変容（相対化）が促される。そのとき欠かせないことは、教師が自身の実践を一人称の言葉で書く・語るという営みである。

研究成果の概要（英文）：When teachers take part in-school lesson studies, it is very important to support teachers — not only the practitioners but also the participants — in becoming conscious of their points of view of lessons and pupils' learning. To be concrete, the supports are to become visible their points of view at reflective conferences, to give meanings to their various points of view and to share their issues or questions among the all participants. In doing so, teachers can construct the basis of collegiality in schools.

In addition, while teachers continue their dialogue based on the fact of pupils' learning in lessons, they can experience the reconstruction of their points of view of teaching, learning and children and so on. It is necessity for teachers to write and talk about their practices as a first person narrative.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：(1) 省察的実践 (2) 校内研修 (3) 授業研究 (4) 同僚性 (5) 教師のライフヒストリー

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで、教師1人ひとりの授業実践の固有性や歴史性を踏まえたライフヒストリー・アプローチによる教師の力量形成へ

の支援のあり方について研究を展開してきた（科研費 H.16-17 若手研究（B）「授業づくりにかかわる教師の力量形成と教師文化の創造的継承」研究代表者：岩崎紀子（旧姓）、

科研費 H.18-19 若手研究 (B)「反省的実践家としての教師の力量発達を支援するアクションリサーチ・プログラムの開発」研究代表者：岩崎紀子)。

これらの研究を通して明らかになったこととして、大きく次の2点が指摘できる。

第1に、研究協力者である複数の小学校教師の実践歴における「転機」に着目したことによって、子ども観や授業観の問い直しを迫られた具体的な出来事を契機として授業スタイルがどのように変容したかが、長期継続的・定期的な授業の参与観察、実践記録の分析、及びライフヒストリーの聴き取りから明らかになった。このことは、教師が直面してきた実践課題の所在を明確にし、教師自身が次なる実践創造の可能性や展望を見出すことを支援することとなった。

教師のライフコース研究を展開する山崎準二(『教師のライフコース研究』、2002、創風社)によれば、教師教育における喫緊の課題の1つは、個々の教師のライフヒストリーと発達特性(多様性、変容性、歴史性)を踏まえた力量形成支援のための研修をデザインしていくことにあるという。研修を通して日常的かつ継続的に授業改善や力量形成を図っていくためには、1人ひとりの教師が、自らの実践の経験を省察するなかで、学び続けることのできる校内研修のプログラムと授業の臨床的研究の方法を編み出していくことが強く望まれているのである。

第2に、教師の授業スタイルを強く規定する実践的知識のありようや信念の形成、実践の省察の仕方に関しては、当該教師が出逢ってきた子どもや同僚との関係、そこで経験した出来事などの教師自身の個人時間、社会時間(職業や家族)のみならず、着任した学校がどのような特徴をもつ学校文化(個々の学校組織に所属する構成員——教師・子ども——が歴史的に形成・選択・創造・継承しながら、時に変容させていく信念・慣習・伝統・思考法の総体)を有し、それらとどのように出逢い、実践を創造してきたかというファクターも強く作用していることを明らかにした。

教師の力量形成を支援する上では、在籍する学校における研修のあり方や教師の学びに対する考え方を射程に入れ、同僚性の構築と連動させた授業の臨床的研究をデザインしていくことが必要である。具体的な授業実践の文脈に即した実践的知識(暗黙知も含む)の共有を教師間で図っていく素地として校内研修が機能するためのしくみを整えていかなければならない。この点は、日本教育方法学会第43回大会(2007)課題研究I「世界における日本の授業研究の意義と課題」においても指摘されており、実践と研究の更なる進展に大きな期待が寄せられている。

本研究は、筆者自身のこれまでの研究の延長線上にあり、教師1人ひとりの授業実践の固有性や歴史性を踏まえた力量形成への支援のあり方を考えるという基本的なスタンスを保持しながらも、とりわけ校内研修における授業の臨床的研究のあり方に焦点化して研究を発展させていくところに、本研究の特徴がある。

現職教育のなかでも校内研修という場はその学校が抱える固有の課題群に対して計画的、組織的に取り組み、教師たちが協働して学んでいくことを要求される場であると同時に、多様な経験を有する教師1人ひとりが、自身の実践の文脈に即して力量形成の契機をつかんでいくことが可能な貴重な学びの場でもある。しかし、学校現場における校内研修は、さまざまな課題を抱えていることが報告されている。

福島市教育実践センターによる公立小中学校を対象にした研修に関する調査(「教職員研修調査研究報告書」H.18.9)では、校内研修での授業研究に対する否定的な意見として、「大切さは理解しているが、現在の忙しさのなかで実施していけば、他の校務や生徒と接する時間の減少を招く」、「指導案作成の負担が大きい」、「授業を行っても表面的な話し合いに終わり、率直な意見をもらえず、教員同士が高めあう雰囲気にならない」等の声が寄せられている。授業研究の重要性を認識しつつも、時間確保の難しさや負担増という意識が阻害要因となり、さらに授業研究を実施したところで、授業研究そのものが自身の力量形成に寄与するものとなり得ていないと受け止められている実態がある。

こうした悪循環を断ち切るには、校内研修における授業の臨床的研究がどのように変わっていくことが必要であるかを、学校現場の抱える課題や教師たちが直面している課題、問題意識との関係において議論され、条件を整備し、改善していくことが求められる。

2. 研究の目的

上記の観点から、本研究では3年間をスパンとして、研究協力校における校内研修(授業研究)の実態調査、課題群の抽出と整理、協力校の実態に即した校内研修プログラムと授業の臨床的研究をデザインすることを課題とする。

3年間という期間を設定することは、①在籍する教師の実践歴や問題意識と協力校の教育課題の調査を丁寧に行い、これまでの校内研修の成果と課題を整理するなかで、②改善点を絞り、研修主任や研究協力者の教師たちと協働して授業の臨床的研究のデザインに見通しをもつことができる点、さらに、③教師の異動による校内研修の運営体制の変動も考慮しながら、協力校において持続可能

な校内研修を運営する基盤を整えていく点からも妥当であり、3年間という長期的スパンで取り組んでいく意味のある研究であると考え。

3年間を通して明らかにすべき課題としては、以下の2点にある。

○課題(1):校内研修における授業の臨床的研究が、個々の教師の力量形成に資するものになるための条件整備について、先進校における取り組みを調査し、加えて先行研究における知見を整理していくことで、研究協力校に必要な研修プログラムの条件及び構成要素を明らかにする。

○課題(2):研究協力校に在籍する教師たちの実践歴と問題意識を把握し、同時に子どもの学びに関する課題群を整理するなかで、協力校の実態に応じた研修プログラムと授業の臨床的研究の手法を開発し、実践を通してその妥当性および継続的実践の可能性と課題を検証する。

3年間という期間で、事例研究としての精度を高めていくことに努めることによって、本研究の成果を研究協力校と在籍する教師たちに具体的に還元していくことを第1に目指し、事例研究から得られる示唆や研究視点をその後の研究の発展に反映させていくことをねらっている。

上記の課題を遂行していく上では、これまで応募者自身が採用してきた(a)ライフヒストリー・アプローチと(b)ケース・スタディによる授業分析の手法を本研究においても活用していく。

(a)教師のライフヒストリー・アプローチを採用することにより、授業実践における教師の教授行為をより深層において規定している信念や観(子ども観・授業観等)のレベルにまで視野を広げ、授業スタイルを深く理解する素地を整えることができる。このことは、佐藤学も指摘しているように、研究協力者となる教師の省察的実践を促進していく上で必要不可欠な手続きである(佐藤学『教師というアポリアー反省的实践へ』世織書房、1997)。

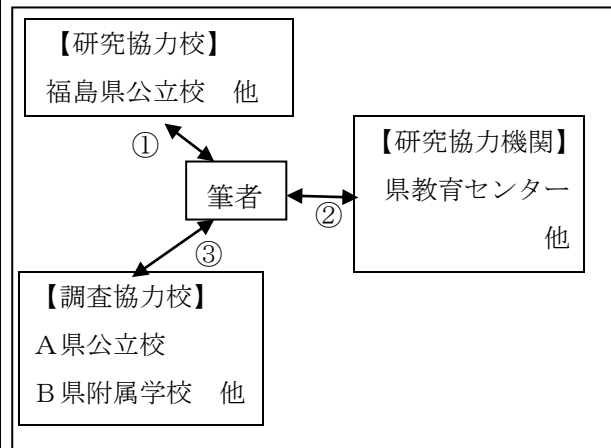
また、これまで採用してきた(b)ケース・スタディによる授業分析では、協力者の教師が提供する授業をビデオで記録し、ビデオ記録をもとに授業における子どもの学びの事実と教師の働きかけの相互作用を具体的に取り上げ、同僚とともに複眼的に授業を読み解いていくなかで、教師の選択・判断の根拠や子どもの学習活動と教材・教育内容との関連づけなど、実践的知識に深くかかわる領域について多角的に批評していくことが可能となる。こうした経験の積み重ねが、実践に根ざした個々の教師の省察を生み出し、教師相互の学び合いと成長を促していくことをねらっている研究である。

3. 研究の方法

本研究は、上記の目的を達成するために、複数の研究協力校と調査協力校、並びに研究協力機関との連携のもとに研究を進めていく(下図を参照)。

まず、下図①の関係は、応募者自身が研究協力校の校内研修に参加し、授業の臨床的研究を協働して行っていくことを通して、教師の省察的実践の創造に貢献しうる校内研修プログラムの開発に着手する関係を示している。②の関係は、研究協力機関である福島県教育センターの研究調査チームに対して、福島県で実施されている現職教育の実態に関する統計データ・質的データの提供を依頼する一方で、同チームが主催する「授業改善に関する研究協議会」の所外研究協力員として応募者の研究成果を提供し、県内の学校における日常的かつ継続的な授業改善に向けての取り組みを支援していく関係を示している。③の関係では、応募者自身が調査協力校での授業研究(校内研修の一環)にアドバイザーとしてかかわりながら、先進的实践校における校内研修の実態等を調査・分析し、その結果を福島県内の研究協力校における校内研修のプログラム開発に反映させていく関係を示している。

なお、これらの学校に対しては指導助言者として関与する機会とは別に調査研究の機会を設けることに対する協力を依頼し、すでに了承を得ている。



本研究を遂行するにあたっての工夫としては、次の2点が指摘できる。

(1) 応募者自身がこれまでの研究や社会的活動を通してラポールを構築してきた調査協力校における先駆的な取り組みや、校内研修の改善に着手した事例について、改めて実態調査や継続研究を実施することにより、本研究の研究協力校での校内研修と授業の臨床的研究に対する具体的かつ強力な示唆を得ることができる。

(2) 研究協力機関においては、全県下における校内研修の実態や課題群が、統計的にも、また質的データとしても把握されている。したがって、応募者が本機関から提供を受けた研究調査の結果を踏まえて研究協力校での事例研究を行い、そこで得られた成果や課題を協力校のみならず、本機関に対しても還元していくことによって、本機関と協力しながら校内研修における授業の臨床的研究のデザインについて、具体的な知見を県内の関係機関に提供・発信していくことが可能となる。

4. 研究成果

本研究の成果として大きく以下の2点が指摘できる。

(1) 校内での授業研究会においては、授業者のみならず、参観者における実践課題に即した授業をみる視点、子どもの学びをとらえる視点を自覚化できる支援(事後検討会における可視化や、視点の意味づけ、問いの共有化)を行い、授業者と参観者とがともに授業研究を通して学び合う関係(同僚性)を構築していくための素地を耕していくことが重要である。

この点については、研究協力校で校内授業研究会にスーパーバイザーとして筆者がかかわりながら、そこで得られた授業記録や教師へのインタビュー、教師へのアンケート調査(転出した教師も含めて)などによるデータを蒐集し、校内での授業研究の経験のどのような点に自身の授業実践を問い直す示唆を見出すことができたかを考察した。

その結果、授業者にとっての実践的課題、気になる子どものすがた、授業づくりのテーマを参観者が事前に知ることができるようにすること(=視点の可視化)に加えて、事後の検討会においては、とらえた子どもの学びの事実相互の間にいかなる関連性や連続性があるかを考察しながら、個々の事実についての意味づけを重視して対話できるようにすること(=視点の意味づけ)、さらには教師たちが探究するに値する具体的な問いを持ち、校内授業研究会の経験を、常にそうした問いと結びつけながら意味づけを図っていくこと(=問いの共有化)が、異質な経験を有する教師集団の中に、ともに授業研究を通して自身の力量を高めていこうとする素地をつくっていくことにつながるということが明らかとなった。

そうして創られていく素地が、具体的な子どもの学びの事実に基づいて臨床的に授業を研究していく教師同士のあいだに同僚性を構築していく上で極めて重要な役割を果たしていくことを見出すに至った(研究業績[学会発表]③、[図書]①参照)。

(2) さらに、授業研究における具体的な子

どもの学びの洞察に基づいた教師同士の対話を継続的に行っていくことを通して、子どもの学びをとらえる教師のまなざし・視点に対して教師自身が自覚的になっていくことが、自身の授業の見方・考え方、授業観や子ども観、学習観を相対化していく契機となることが明らかになった。

複数の教師に対するインタビュー並びにアンケート調査を通して得られたデータによると、授業中の教師自身の行為やことばがどのような思考や判断に基づいて行われていたかを、特定の場面の子どもの様子に即して具体的にふり返る経験を通して、自分に「見えている」できごと、「見えていない」できごとがあるのは、自身がもつ「視点」やみる枠組みの制約があること、また、自身の行為やことばが子どもの学びを停滞させる具体的な要因を生み出していたりすることに気づいていくことを促していることが明らかになった。

こうした気づきの経験は、教師が自身の実践を経験として記録すること、つまり一人称のことばで物語として「書く」という行為を通して促されることが研究協力者らとの事例研究によっても支持される結果となった。教師が自身の実践の履歴やライフヒストリーをたどりながら、長年にわたって培ってきた自身の授業の見方・考え方、学習指導に対する信念を自覚化し、さらに相対化していくためには、複数の視点が交錯する授業研究会での教師相互の対話に向けられる永続的な努力が求められることが浮き彫りになってきた(研究業績[雑誌論文]①、②ならびに[図書]①、[学会発表]③参照)。

以上のことから、本研究を通して、教師の省察的実践の創出に資する校内研修プログラムと授業の臨床的研究のデザインにかかわって、その重要性が高いと認められる鍵概念は以下のように整理できる。

- 授業研究会における視点の可視化
- 授業研究会における視点の意味づけ
- 授業研究会における問いの共有化
- 実践の記録を、一人称の言葉で物語として書くという営み

○授業の特定の場面における教師の行為を支える(=可視化しづらい)思考、判断の様相を検討対象に据えた授業研究会運営のデザイン

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

- ① 吉永紀子、教室における子どもの〈声〉*〈文字〉を育てるといふこと—梶田萬理子(奈良女附小)の実践を手がかりとして—、福島大学国語教育文化学会編『言文』、査読無、56、2009、78-90

- ② 吉永紀子、教師の力量形成と「変化」—遠藤隆宏氏の授業スタイル—、授業づくりネットワーク、査読無、303、2010年、18-21
- ③ 吉永紀子、学びの基盤にあるもの—〈自分〉という座標軸をもつこと—、学習研究連盟季刊誌『飛翔』(増刊号)、査読無、35、2010年、3-4

[学会発表] (計3件)

- ① 吉永紀子、教室談話における教師の役割に関する一考察—自律した学び手の育ちを志向する授業の分析をもとに—、日本教育方法学会第44回大会、2008年10月12日、愛知教育大学
- ② 吉永紀子、教室談話における教師の役割に関する一考察(2)—自律した学び手の育ちを志向する授業の分析をもとに—、日本教育方法学会第45回大会、2009年9月26日、香川大学
- ③ 吉永紀子、教師の〈観〉の編み直しを支える授業研究、日本教育方法学会第46回大会、2010年10月9日、国土館大学

[図書] (計1件)

- ① 吉永紀子、生徒・同僚との〈対話〉を通して〈学びとは何か〉を探究する教師たち—〈学び合い〉が生まれる学校づくりをめざして—、秋田喜代美編『教職研修総合特集 教師の言葉とコミュニケーション—教室の言葉から授業の質を高めるために』、教育開発研究所、査読無、2010年、184-189

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉永 紀子 (YOSHINAGA NORIKO)
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：30344823